



SHIMANE
University

島根大学広報誌 広報しまだい

Shimadai

2016.4 vol.28

地方大学の役割と 地域の期待

【学長スペシャル対談】 島根県知事

溝口善兵衛

特集 オールしまねCOC+事業

キックオフセミナー&しまね大交流会を開催

話題ゾクゾク、興味モリモリ。

島大

検索



学長
スペシャル対談

撮影協力/サンラボーむらくも

島根県知事

島根大学 学長

溝口善兵衛 × 服部泰直

Mizoguchi Zenbee

Hattori Yasunao

溝口善兵衛(右)/1946年生まれ。島根県立益田高等学校、東京大学経済学部卒業。大蔵省(現・財務省)主計局次長、大蔵大臣官房長、財務省財務官、(財)国際金融情報センター理事長などを経て、2007年4月より島根県知事(現在3期目)。趣味は自然の中でのウォーキング、囲碁、社寺・旧跡巡り、美術鑑賞。

司会:松崎貴(まつざき・たかし)/島根大学地域未来戦略センター長。2007年島根大学生物資源科学部准教授、2012年島根大学生物資源科学部教授。理学博士。

■島根大学の研究・地域貢献事業紹介

- ①法文学部 加川 充浩准教授 11
- ②生物資源科学部 井上 憲一准教授 13

■COC事業レポート 15

■しまだイトピックス 17

■しまだいNEWS 19

「島大アンバサダ」がキャンパスツアーを開催

■海を越えた島大生 20

■キャンパスチェック 21

■学生プレス研究会 23

■サークル紹介 25

混声合唱団/SMILE

■島根スサノオマジック紹介・
島根大学支援基金寄附者一覧・プレゼント 26

地方大学の役割と地域の期待

「地方創生元年」といわれた昨年から、島根県でも産学官の協働による地域活性化に向けた動きが加速化しています。今回のゲストは、「子育てしやすく 活力ある 地方の先進県 しまね」を目指して未来を見据えた施策に取り組む、溝口善兵衛島根県知事。地域振興の中で大学が果たすべき役割と、地域社会と大学との連携について、服部学長と活発に意見を交わされました。

総合大学としての機能を生かして地域貢献を進める

— 島根県では「地方創生」に取り組んでおられますが、島根大学も大学憲章に「地域に根ざし、地域社会から世界に発信する個性輝く大学」を掲げており、グローバル化が進む時代における地域のシンクタンクとして、研究開発や人材育成に務めてきました。

た。まず服部学長より、これから島根大学が目指す方向についてお話しください。

学長 教育や研究と併せて、地域活性化も地方大学の果たすべき役割の大きな柱の一つです。今年度から始まる「第3期中期目標・計画」においても、研究面では、地



域の知の拠点として、地域の課題に密着した研究やプロジェクトを推進し、その成果を社会に還元していくこと、人材育成面では、アクティブラーニングを取り入れた授業を増やして、主体的に学ぶ力、グローバルな視野と高度な専門性をもつて地域や世界各地で活躍する学生を育てることを掲げました。島根大学は国立大学としては小規模ですが、総合大学としての機能をしっかり備えており、それを生かした地域貢献を進めていきたいですね。

— 地域活性化において大学が目指す方向は、島根県の目指す方向ととても近いように思います。続いて、地方創生に向けた県の目標や取り組み、課題などをお話しいただけますでしょうか。

2016.4 vol.28
Shimadai

島根大学広報誌
広報しまだい

■学長スペシャル対談 島根県知事 溝口 善兵衛	1
■〈特集1〉オールしまねCOC+事業 キックオフセミナー&しまね大交流会を開催	5
■〈特集2〉大学院教育学研究科を再編 新たに[教職大学院]を設置し、 次代のスクールリーダーを養成する	9

県と大学が協力して 若い世代の県外流出を食い止める

知事 島根県では人口の減少、特に若い世代の流出が構造的な問題となっています。若い人たちが一旦県外に出てしまうと、なかなか帰ってこないのが、高等教育機関の充実はもちろん、安心して働ける雇用が増えるよう、産業を振興することが必要です。島根発のプログラム言語 Ruby の取り組みにより集積が進んできたソフト

系IT産業の強化、世界遺産やユネスコ世界ジオパークなど豊かな地域資源を活かした観光、地域ブランドによる農林水産業の振興

などを総合的に推進していきます。

仕事の次は子育てです。結婚支援や保育料の軽減、育休等の中小企業向け奨励制度など子育て支援も行い、若い世代の仕事と子育ての両立も支援していきます。

島根大学にも、地方創生に向けて大きな役割を果たしていただけたものと期待しております。

—— 島根大学は平成25年より「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」、昨年より「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」に採択されてい

ます。各事業は地域活性化への起爆剤になるものと考えますが、それぞれの狙いをお話ください。

学長 COC事業では、今年度から全学部を対象とした「地域貢献人材育成入試」を実施し、また学部横断型の「地域貢献人材コース」を設置しました。本コースでは、専門分野を横断した形で、地域資源の活用や地域課題の解決に取り組み、地域のリーダーとなれる人材を育成していきます。

一方、COC+事業は島根大学だけでなく、県内すべての高等教育機関が行政や企業、NPOなどと連携して、地方創生に資することが目的です。島根大学では卒業生の地元就職率を32%から42.5%へ増加させるといふ具体的な目標を持つて取り組みます。島根大学には一学年に千人を超える学生

がおり、そのうち約700人は県外出身の学生です。その人たちに島根県の魅力を感じて残ってもらい、合わせて約300人の県内出身の学生も引きとめていく必要があります。そのためには、地域産業の活性化や新産業の創出、農林水産業の振興などに大学が貢

献することが欠かせません。

企業の方に学生が考えているであろう魅力的な企業のことを聞き、そしてもちろん給与条件を挙げられるのですが、学生に同じことを聞きますと、職場での人間関係を給与条件より上位に挙げています。このような企業と学生との意識の差を解消し、より多くの学生が県内企業を良く知り、就職することを目指します。

—— COC+事業への島根県としての対応や期待をお聞かせください。**知事** 島根大学が、県内産業の振興と地域貢献人材の供給につながる取組みをしていただくことは大変ありがたく思っております。インターシンプのお話が出ましたが、

実施に当たって県としても学生への宿泊費の助成、地元企業との調整など最大限の協力をいたします。県の総合戦略においても、県内就職率と県内企業へのインターシンプ参加者の増加をKPI(重要業績評価指標)として設定しました。島根大学との連携をより一層強化し、達成に向けた取組みを進めていきたいですね。



目指し、より連携を強化することを再確認。



終始和やかに進んだ、知事と学長の対談。共に島根県の地方創生を

守ることと変えることとの バランスを取ることが大学の役割

—— 島根大学はグローバル人材を育成するため、どのような事業を行っておられますか？

学長 島根大学は「諸外国との交流の推進」を大学憲章に謳っており、eラーニングや英語高度化・中国語実用化プログラムを推進しています。留学支援制度も拡充させますが、学生を海外に送り出していくためには、まず語学教育を充実させ聞く、話すことへの恐怖心を取り除くことが大切だと思います。

知事 海外からの観光客が大幅に増加しており、島根県としても国

際化に対応する必要性が増してきます。文部科学省の「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」などを通して、グローバル化への対応についても島根大学との連携強化を図っていききたいですね。

—— 新産業としてヘルスケアビジネスに大きな期待が寄せられています。島根県での動きと島根大学への期待はいかがでしょうか。

知事 ヘルスケアを含む健康・医療分野は、市場や雇用の創出が見込まれる分野であり、昨年「島根県ヘルスケア産業推進協議会」を設立

しました。島根大学にも医学的検証やシステム開発などで協力を頂き、支援事業を進めていきます。

学長 医学部や生物資源科学部はもちろん、ハード面なら総合理工学部、ヘルスツーリズムなら法文学部と、島根大学としても総合大学の強みを生かして、あらゆる分野からヘルスケアへの参画が可能だと考えます。

知事 Uターンして来た若い方も、安心・安全な食や環境で子育てできることを島根県を選んだ理由に挙げており、ヘルスケアへの要望は世代を超えたものだと思います。

—— そうした意味で、平成29年創設の新学部「総合人間学部」にも大いに期待が集まると思います。

学長 新学部は「人が長く健康に生きられる地域社会の創造に資すること」を目的とし、健康科学や社会福祉、心理学などをカバーする文理融合の学部です。地域住民の健康長寿を心身両面から支えることができる人材の育成が目

標です。

知事 新たな発想やアイデアが生まれ、研究面・教育面での効果も高まることを期待しております。

学長 時代の要請に因應する一方で、現時点では不要と思われる学問分野を継承していくことも大学の役割だと思います。今は不要だと思えても、10年後、20年後に必要になるものは必ずある。守るべきものをしっかり守り変えるべきことを変えることが大切ですね。

知事 今回お話しして、島根大学と県の目指す方向性は合致していることが再確認できましたので、これからも手を携えて進んでいきたいと思えます。



服部泰直/1956年生まれ。1993年4月島根大学理学部助教授、1995年6月島根大学理学部教授、同年10月島根大学総合理工学部教授、2011年10月島根大学総合理工学部長、2012年4月島根大学大学院総合理工学研究科長、2015年4月島根大学学長。趣味はサッカーで、国体出場の経験も。



特集 1

オールしまねCOC+事業
キックオフセミナー&しまね大交流会を開催

「地域未来創造人材の育成を加速するオールしまね協働事業」いよいよスタート!

昨年9月、島根大学は平成27年度文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」に採択されました。この事業は、島根県立大学、同短期大学部、松江工業高等学校の参加も受け、島根県や県内の企業、NPO等と協働して推進するもので、地域が求める人材を養成するとともに魅力ある就職先を創出し、島根県全体の活力向上と地方創生に貢献することを目的としています。

事業スタートの節目として12月12日に「キックオフセミナー&しまね大交流会」を松江くにびきメッセ大展示場にて開催しました。県内の高等教育機関・企業・団体などから1000人を超える参加があり、島根県の未来に向けて熱気あふれる一日となりました。

「キックオフセミナー」

開会挨拶

島根大学長 服部 泰直



この度採択されたCOC+事業には、島根大学だけでなく、県内の4つの高等教育機関が参加します。本日開催の大交流会においても、非常に多くの産・官・学・民の参加をいただきました。今後は、より様々な連携による新しいビジネスや産業の創出が望まれる時代になります。これは教育機関だけで成し遂げられるものではありません。企業や各自自治体の皆さんも、島根県の

5年先10年先の礎を目指し、一体となつて取り組んでいけるよう、ぜひご協力をお願いします。

来賓挨拶

島根県知事 溝口 善兵衛



島根では人口の減少、特に若年層の流出が大きな課題となっております。このため、若い人たちに島根に住んでもらい、子どもを産み育てられるよう、県では「総合戦略」を作成し、産業振興による雇用の創出や結婚・子育て支援の強化などに取り組み、「子育てしやすく、

活力ある地方の先進県しまね」を目指すことにしています。今回のCOC+事業は、県内の高等教育機関が一丸となり、県内企業、NPO、自治体も一緒になって、県内企業へのインターンシップの大幅増加や県内就職率のアップなどに取組むものであり、若者の県内定着につながるものとして大いに期待しております。こうした皆様との連携強化により、人口減少を抑制するよう、さらに努力していきたいと考えております。

来賓挨拶

文部科学省高等教育局大学振興課
大学改革推進室長 **猪股 志野**

若年層人口の都市部への流出タ
イミングは、大学進学時と就職
時の2つであることがデータでも
はつきり出ています。COC+事
業は、地元での就職率向上と雇
用の創出が大きな目標です。ぜ
ひ都市部の大学以上に魅力的な
大学となり、その知の力を島根
県の産業振興と雇用創出に生か
してください。5年後の成果指標
の取り組みを願っています。

COC+事業説明

島根大学副学長(地域連携・貢献担当)
佐藤 利夫



今回のCOC+事業では目に見
える成果を5年間の事業期間で
挙げるのが求められています。
具体的な目標として島根県内で
の就職率10%アップと、企業での
インターンシップ参加者数130
人増を掲げています。また、新た
に雇用を創出したベンチャー企業
などへ約20人の就職も目標としま
した。そしてこの事業は5年間で
終わるわけではありません。5年
間で基盤を整え、以降はこれが
自然に拡大しつつ継続していくよ
うな流れを作っていくことが重要
です。いろいろな意見をいただき
ながら、より良い基盤を作り上げ
ていきたいと思っておりますので、
ぜひご協力をお願いします。

記念講演

「人・地域を活かす」
小さな点を結び 新ビジネスの可能性

講師
株式会社ソアラサービス代表取締役社長
牛来 千鶴



記念講演として、広島で地域の特
長を生かした商品開発や、弟子入り
型の即戦力養成、プロから学ぶセミナ
ーなど、人と企業をつないで地域を元
気にするプロジェクトを推進する株
式会社ソアラサービス牛来氏が登壇。
自身のこれまでの取り組みや、そこか
ら得た教訓、新しい構想などについて、
丁寧に語っていただきました。

講演の最後に牛来氏は「夢を大きく
具体的に描き、それを信じ、伝え、諦め
ることなく継続することで物事は実現
するものだ」と思います。自分と周りの人
が元気になれば企業が元気になり、そ
うすれば地域は必ず元気になる、この思い
でやってきました」と締めくくりました。
実際に経験した事例を交えながらの講
演は教訓に満ち、参加者は時折メモを
取りながら真剣に耳を傾けていました。





238ブース、1000人以上の 参加者で賑わった「しまね大交流会」

「しまね大交流会」

キックオフセミナーに先立って行われた「しまね大交流会」は、「未来を担う若人と地域の人・シーズ・ニーズが出会う大交流会」がテーマ。島根県内の高等教育機関の学生・教職員を含む、地域の多種多様なステークホルダーが一堂に会する機会として企画され、企業や団体と学生が交流する催しとして、これまでにない大規模なものとなりました。

当日は企業から68、自治体から31、NPO・その他団体から36、各大学・高等専門学校から96の合計231団体が238のブースを出展し、事業内容や研究成果を紹介。10時から14時という短い時間でしたが、来場者だけでなく出展者同士の情報交換も随所で見られ、積極的な交流が図られました。また、参加した学生も各ブースを回り、担当者からの説明を熱心に聞いていました。学生にとっては普段とは違う

刺激を受ける良い機会となったのではないのでしょうか。



出展者の声

協栄金属工業株式会社
小山 久紀さん



弊社は雲南市で多品目の金属加工製品を製造しています。仕事は県外からも受注をいただいています。人材はぜひ地元から得たいと思っています。

今回の交流会では企業同士で実際にビジネスの広がりがありました。学生さんに弊社を知ってもらった。これまでは地元企業のことを学生さんが知らない、という状況があったと思います。企業のことを理解しないまま就職すると、どうしても離職率が上がってしまいます。それを解消するためにも、インターシップや職場見学を大学と企業が協力して積極的に進め、お互いの溝を埋めていかなければなりません。長く地域で活躍する人材を育てるためにも重要なことだと思います。

NPO法人
松江サードプレイス研究会
福村 敬香さん



サードプレイスとは「家」「職場」「学校」の間を結ぶ第三の場所のことです。私たちは様々なプロジェクトを進めることで、松江を中心にゆとりと生きがい創造していくことを活動の柱にしています。

今回、縁あってこの交流会に参加しましたが、大学が主となってこういった催しを開催することは素晴らしいと感じました。ブースを回ってみて、いろいろな団体を知ることができました。学生さんの多様な研究内容も興味深かったです。

島根大学には、地域との連携をさらに期待しています。他県から島根に来ている学生さんも多いと思いますが、せっかくですからもつと松江に興味を持って、どんどん街に出て地域を知って欲しいと思います。

雲州志士の会
吉廣 之晴さん



雲州志士の会は、企業経営者の有志で結成された団体で、島根県の経済や産業をどう盛り上げ、全国に広げていけるかを考えながら活動しています。当然、経営に携わるメンバーが多いのですが、みな共通して願っているのは、学生さんが大学で学んだことをぜひ地元の企業で生かして欲しい、ということですね。経営者は、会社をともに運営していける人材を求めています。そういう意味で、企業と学生が交わるこういった催しは双方にとって有意義だと思います。

島根大学に期待する点とは、産業や市場といった視点をさらに取り入れて、研究分野を広げていただくことです。それによって、企業もより大学を頼りやすくなり、連携も強まるのではないのでしょうか。

島根県立大学
総合政策学部3年生
赤名 真悠子さん(右)
伊藤 歩美さん(左)



私たちは、江津市にある「風の国」という温泉リゾート施設の集客策について、調査研究をした結果を展示しました。学生の視点で集客策を考えるという課題に対して、島根県立大学の学生が企画し「風の国」と江津市にプレゼンテーションしたもので、幾つかの案は今後実際に実施されるかもしれません。

今回の交流会でいろいろなブースを見学できて、とても良かったと思っています。特に島根大学は学部が多く、展示の内容も多彩で刺激になりました。私たちは浜田キャンパスなので松江や出雲とは距離もあり、島根大学の学生さんと普段あまり関わることはありません。今後もっと大学同士のつながりが強まれば、新しいことにも挑戦できそうな気がします。

島根大学
生物資源科学部4年生
磯本 光志さん



植物育種学研究室として植物の品種改良について出展しました。大勢の方がブースに来られました。中にはビジネス目的の方もいて、とても刺激になりました。これまで企業の方と話す機会があまりなかったのですが、自分たちの研究が社会に対して有用なものだと実感できたことが一番の喜びです。地域の大学として、ここでしかできない特色のある研究をやっていくことが重要なのだと感じさせられました。

空いた時間に他のブースを見て回ったのも良い経験になりました。自分の知らなかった研究分野や企業のことを知ることができました。他大学の活動も興味深かったです。今後こういった催しがあれば積極的に参加したいと思います。

新たに「教職大学院」を設置し、 次代のスクーラーリーダーを養成する

教育現場への多様なニーズに応じられる人材を

島根大学は今年度、大学院教育学研究科の改組を行い、「教育実践開発専攻〔教職大学院〕」と「臨床心理専攻」の2専攻を設置しました。このうち教育実践開発専攻〔教職大学院〕（以下、教職大学院）は、地域の学校教育現場が抱える様々な教育課題

に対応することができ、高い総合力を持ったスクーラーリーダー（中核的中堅教員）を養成することを目指しています。

近年の学校教育の現場では、子どもの学習意欲低下、社会性の不足、いじめや不登校、保護者からの過剰な干渉など、その課題

が深刻化、複雑化する傾向にあります。そうした教育課題の変化に対し、高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた教員の養成をはかる

目的で創設されたのが、専門職大学院の一つである教職大学院です。

島根大学に設けた教職大学院は、この制度に則りつつ、山陰という地域性も踏まえた上で、教育

現場で様々な立場の人と協働しながら指導的役割を果たすことのできる教員を養成していきます。

理論と実践で学び続ける教員の養成

教職大学院では、学部新卒学生と学校教育現場から派遣された現職教員学生とが、切磋琢磨して共に学びます。現職教員

の1年目は、主に大学での講義・演習によって理論や技能を習得し、2年目は勤務校において、その学校や地域の教育課題を実践

【教職大学院が目指す教師像】

学び続ける教師

子どもをよく理解できる教師

組織の中で力を発揮する教師

優れた教科指導力を持つ教師

子ども支援力

学校創造力

授業デザイン力

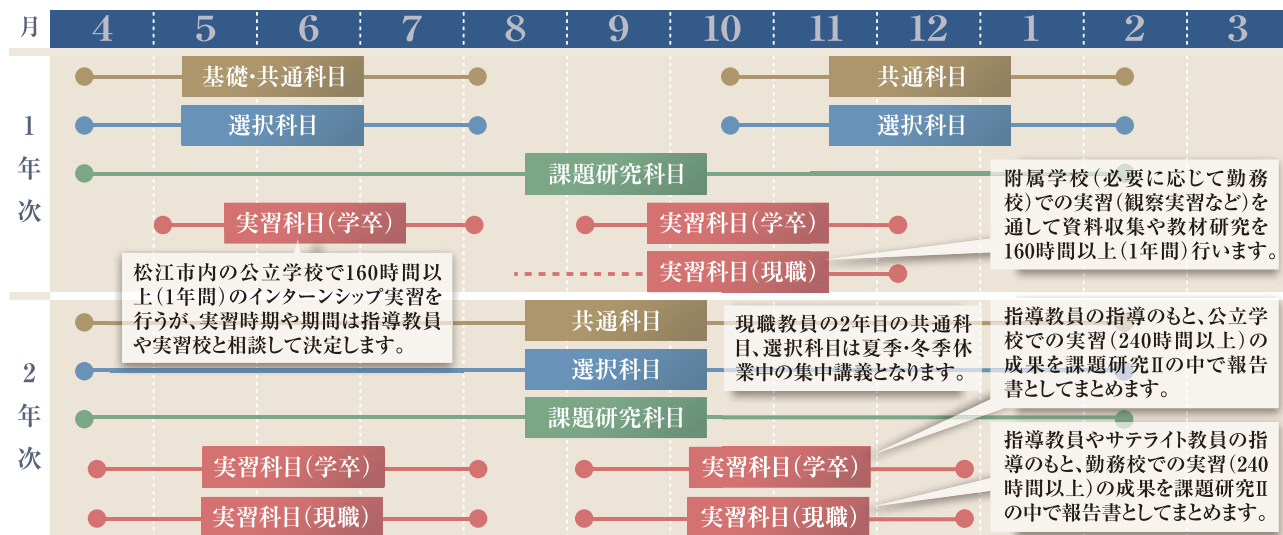
省察による教育観の深化

【教職大学院が育成する力】



教育現場での豊富なキャリアを持つ実務家教員陣。(右から)池尻特任教授、三島特任教授、長特任教授。

●教育実践開発専攻(教職大学院)の2年間



的に研究する実習に取り組みます。一方、学部新卒学生は、主

に松江市内の小中学校におけるインターン実習によって教育実践力を高めながら、教育現場に即した研究テーマを探求します。

■山陰の教育課題解決をサポート

2年間を通して、主に山陰地域の教育課題を対象にしながら研究手法や教育理論を身につけ、理論と実践を往還しながら学び続ける教員の素養を養っていきます。そのため、教育現場で豊富なキャリアを積んだ実務家教員7名が新たに専任教員として加わり、研究者教員との協働による指導の下で、濃密で計画的な履修を進めます。

島根大学は、山陰地域で唯一、学校教員養成に特化した学部を持つ大学であり、地域の教育課題の解明と解決に積極的に取り組む責務を担っています。

現職教員は勤務校や地域

の教育課題を担って、県や市町村の学校から教職大学院に派遣されます。その課題に関して専門性を有する3名の大学院教員が主・副指導教員となり、現職教員学生の勤務校に向き、勤務校の先生方とも協働しながら

2年目の実践研究(実習)を進めます。このように現職教員の派遣校を「地域拠点校」とし、教職大学院の機能を、直接、地域の教育課題の解決に役立てることで山陰地域の教育力向上に貢献していきます。

熱意ある人材を山陰の将来を担う教育者へ



島根大学大学院教育学研究科
教育実践開発専攻(教職大学院)
専攻長・教授 肥後 功一

現代の教育現場では、教員一人ひとりに求められるニーズが、昔よりも複雑になっています。そうした状況に対し、総合力を持った教員を養成するのはもちろんですが、同時に学校経営、教科指導、子ども理解のいずれかを、今後の自分の強みとして伸ばせるプログラムにもなっています。

また3年間の「長期在学プログラム」があることも、本教職大学院の特色です。たとえば県外の大学で中学校教諭の教員免許を取ったけれど、ぜひ島根県にUターンして小学校の先生になりたいという場合、このプログラムを利用すれば、修了時に小学校教諭専修免許状が取得できます(幼稚園教諭または中学校教諭の一種免許状を有していることが必要)。熱意ある学生や優秀な現職教員がスクーラーリーダーとして育ち、山陰両県の教育を牽引する存在になるよう、私たち教員も研さんを積みみたいと思います。



住民・行政・専門家・学生も参加して、地域福

地域福祉を担う人材育成と 個性ある地域社会づくりに 理論と実践で取り組む

地域社会の中で人々が安心して暮らすことのできる福祉のあり方を追究する加川准教授にお話を伺いました。

法文学部
福祉社会教室 准教授
かがわ みつひろ
加川 充浩



福祉の仕事では、多様な暮らし方や価値観に共感する力が重要です。学生には現在の社会を的確に理解し、よりよい生活支援を構想できるようになってほしいと思います。

地域住民や行政と一緒に 地域を住みよくしていく方法を考える

学生時代は国家レベルでの政治や政策について学んでいた加川准教授が、地域福祉の分野に興味を持ったのは大学院に進学しようとした時だった。大学での学びの中で、「地域をよりよくしていきたい」と活動する人々を目にしていくうち、実際に人が日々を暮らす地域こそが、社会を変革していく上で重要だと感じたのがきっかけだ。

「住み慣れた地域で、その人らしく安心して暮らす方法を構想し、また実践するのが地域福祉です」と語る加川准教授は、「地域住民（とその福祉活動）」と「自治体の福祉政策（と福祉計画）」の両方を研究対象とする。両者の視点を偏ることなく比較検討し、双方を結びつけて考えることが、効果的な課題解決策へとつながるからだ。そのた

め、加川准教授は積極的に地域と関わる。例えば、地域福祉計画の策定がテーマの場合、地域の課題は何かを住民の生の声を聞きながら洗い出し、政策としての解決策を提案。それが実際にどういった効果を及ぼしたかも、後に住民と共に検証していく。理論だけでなく、現場の実態から学んで修正していく姿勢が、研究には欠かせない。

長期的に取り組んでいるテーマは、島根県ならではの地域性に関わるものだ。「そもそも福祉は地域に寄り添っていないかもしれません。島根県では、助け合いや問題共有についての意識が強いと感じます。そうした島根県の強みを生かした相互扶助のモデルを明らかにしていくことが、長期的な目標の一つです」と加川准教授は語る。

山陰で唯一の社会福祉士養成校として 課題解決を担う学生を地域に送り出す

加川准教授のもう一つの目標は、地域社会の課題解決に貢献できる人材をできるだけ多く育成し、輩

出していくことだ。島根大学法文学部社会文化学科には、福祉社会コースが設けられ、国家資格である



◀学生の卒業後も教員が職場を訪問し、強い関係づくりを継続する。

▼社会福祉士国家試験対策の勉強会の様子。学生は、国家試験対策のため自分たちで「自主ゼミ」を運営し、大学は場所の提供やアドバイスなどのサポートに徹する。



地域との関係づくりの中で行う住民向け講演会。意見交換の場では、住民からの貴重な意見も多く集まる。



松江市地域福祉計画・地域福祉活動計画の策定のためのワークショップ。社のあり方について議論する。

注目キーワード

精神保健福祉士

精神医療・精神福祉領域に特化した国家資格で、精神障害者に対して社会復帰への助言や指導、日常生活に必要な訓練や援助を行う。今後は、認知症高齢者サポート、企業でのメンタルヘルスケアなど、社会のニーズに合わせて活躍の場が広がっていくことが予想されている。島根大学では、2017年度の設置に向けて動いている新学部で、在学中に受験資格を得られるコースを設ける予定。資格を持つことにより、学生は職業選択の幅も広がる。

加川准教授は、合格のためには現在の社会と人の動きをよく理解することが重要だと言う。「福祉は法律や制度と密接に関わりがあまりますから、制度が変更になった時な

は60〜70%をキープしている。加川准教授は、合格のためには現在の社会と人の動きをよく理解することが重要だと言う。「福祉は法律や制度と密接に関わりがあまりますから、制度が変更になった時な

「社会福祉士」の受験資格が得られる。同時に、大学ならではの人間や地域を理解する科目も履修できる。社会福祉士養成校としては山陰で唯一、そして国立大学に限ると中国地方でも唯一の存在だけに、自然と高い目的意識を持った学生が集まりやすい。「社会福祉士の国家試験において島根大学の合格率は高く、常に全国平均を上回ります」と加川准教授が言うように、合格率の全国平均が20%台後半で推移する中、島根大学は60〜70%をキープしている。

島根大学では、社会福祉士に加えて「精神保健福祉士」の受験資格も得られる養成コースを構想中だ。地域福祉のさらなるニーズに応じられる人材の輩出に期待がかかる。ど、なぜ変更になったかにも視野を広げて考えてもらうことで学生の理解度も上がります(加川) また、大半の卒業生が福祉関係の現場へと就職していく中で、福祉業界に島根大学卒業生のネットワークが構築されていることも、学生にとっては刺激となっているようだ。卒業後は教員が職場を訪問し、相談に乗ったり情報交換をしたりという交流も続く。そうした縦横の関係が強いこともあつてか、他県から入学しながら、卒業後は島根県で就職する学生も多いという。



食と文化、環境を支える 地域農業のマネジメントを 科学する

地域農業の経営やネットワークを現場と理論の両面から分析する井上准教授に、ご自身の研究と学生との取り組みについて伺いました。

生物資源科学部
農林生産学科 准教授

いのうえ のりかず
井上 憲一



私たちの食や地域を支えている農業は、農家の方々の創意工夫とネットワークによって成り立っています。島根県の農業は先進的な取り組みにより全国からも注目されています。

多様な事例の宝庫である農業先進県で 農と地域のネットワークを研究

中山間地域が多い島根県では、大規模よりも小規模経営の農家が多数を占める。若い担い手が減り、国内全体の農業が縮小する中で、島根県では全国に先駆けて地域農業を維持するための様々な取り組みを行ってきた。その事例や作業システムを多角的に分析、より効果的・効率的な農業経営を模索し、モデル化するのが井上准教授の基本的な研究テーマだ。

「中山間地域では谷筋に沿って農地が広がっているため、規模を拡大してビジネスにするという戦略が取りにくい。加えて、山間に行けば行くほど人材の数も限られるという弱点があります。しかしその分、規模ではなく知恵と工夫、地域のネットワークで差別化をはかってきました」（井上）

従来の家族経営を母体としなが

長期的な現地調査を取り入れることで より深く、幅広い視点での学びをサポート

地域ネットワークの進化という中で、学生たちの学びも変化して

らも、法人化して従業員を雇用するといった企業経営を取り入れたり、集落内でグループを作り加工品を販売したりと、島根県内の農業経営形態は多様性に富んでいる。特に「地域自給」というシステムは、TPP（環太平洋連携協定）参加といった農業を取り巻く状況が変化する中、全国的にも注目されている。

「地域の方々の長年にわたる実践によって、他にも地域貢献型集落営農、広域的な資源循環型農業、六次産業化などが各地で展開されています。これらの取り組みに共通するのは、人々のネットワークです」と井上准教授が語るように、狭いからこそ地域全体で農業を支えるという意識も強く、生産者と消費者、行政、大学、民間企業などの多方面のネットワークが構築されている。

いる。現地を一年かけて調査・研究を行う授業では、グループごと

なく、イベントの企画立案や参加もする。



豊かな農業は下流域の住民にも様々な恵みをもたらす。



集落営農組織と畜産業のネットワークにより実現した水田放牧。



「しまね合鴨水稲会」総会の一コマ。生産者と消費者が共に食事し交流を楽しむ。



「農村調査分析論」の現地調査の様子。学生はヒアリング調査だけで

注目キーワード

【 自立した農業へ「地域自給」 】

家畜の飼料から加工品に至る少量多品目を生産し、地域で販売・消費するという小規模複合農業をベースにした取り組みで、吉賀町柿木村や浜田市弥栄町、雲南市木次町などが知られている。井上准教授も執筆に関わった『地域自給のネットワーク』では、県内の優れた施策や事例も紹介されており、農業を通し、人々の生き方、社会のあり方を考えることができる。



井上准教授も分担執筆。
井口隆史・榎湯俊子 編著(2013)
『地域自給のネットワーク』コンズ

に場所を定め、2泊3日のフィールドワークを行っていた。しかし、ここ数年は調査する地域を一カ所に固定し、学生の進捗に応じて随時現地に足を運ぶという方法をとっている。

「一度限りの調査では、現地を見る時期が限られる上、大学側がある程度方向性を決めなくてはいけません。また、地元の方から、初対面でいきなり交流をはかるのは難しいという声もありました」(井上)

今後の社会人生活でも役立つと井上准教授は考えている。

農業はビジネスという側面だけではなく、文化の継承、環境保全というように地域貢献という観点からも重要。そのため、県を挙げて個々の取り組みを支援しているのも島根県の特徴である。「東京からも多くの研究者が訪れるような優れた事例がたくさんある。大学が現地に近いという地の利、先人たちの蓄積も生かし、島根の農業ネットワーク作りの一助となれば」(井上)

農家の方々、学生とともに、農業を支え次代に受け継ぐため、日々研究を続けていく。



「がん撲滅プロジェクトセンターの紹介」新聞記事(2016年2月7日付け・山陰中央新報)



「がん撲滅プロジェクトセンターの取り組みをわかりやすくお伝えする」をテーマに内科・外科・基礎医学の観点から市民公開講座を開催。

島根大学発のバイオ医薬品開発に向けて がん撲滅プロジェクトセンター

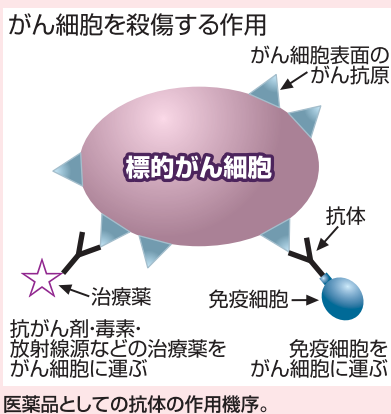
多くのがん患者が治癒できる可能性があるなかで、膵がんの5年相対生存率は10%以下となっており、膵がん患者は「死亡宣告」を受けたにも等しい状況と言えます。島根県は全国と比べても膵がん罹患率が高いことが知られており、地域における高齢者の安心な暮らしを実現するためには、難治性がん、特に膵がんに対する早期診断及びより良い治療法の早急な構築は喫緊の課題です。

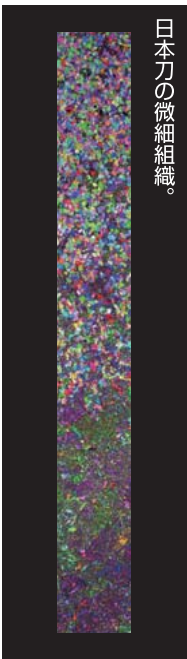
このような地域課題に立脚して進めてきた島根大学独自の研究プロジェクトから生まれた学内研究成果を基に、文部科学省から島根大学特別経費プロジェクト「がん撲滅に向けての集学的研究の推進—膵がんを中心とした難治性がんに対する低侵襲的ながん治療法の確立—」(平成25年度から5年間)が予算措置されました。このプロジェクトを基盤として、臨床および基礎研究の垣根を越えて12名の医師・研究者から構成される本プロジェクトセンターでは、集学的研究の推進により膵がんを標的とした新たな抗体医薬品・免疫療法の開発を進めています。

膵がん撲滅プロジェクトセンター長
島根大学医学部 病態生化学
教授 浦野 健



がんは我が国において死亡原因の第1位であり、今後も高齢者を中心に増加が予想され、国民の健康に対する最大の脅威となっています。全国がんセンター協議会が2016年1月に公開した集計によれば、がんの中でも、膵がんの5年相対生存率は9.1%と最下位です。予後が悪いことが知られている膵がんでは、肺がん(43.9%)、胃がん(73.1%)、大腸がん(75.9%)です。本プロジェクトセンターでの膵がん治療法の確立が島根県、ひいては全国の膵がん患者の救済につながるようにプロジェクトを推進していきます。





日本刀の微細組織。

たたらの実習で炉を壊して鉤(けら)を取り出すところ。

地域の金属関連産業の新たな発展のために



たたらナノテクプロジェクトセンター

金属材料は青銅器時代、鉄器時代と人類の進歩に重要な役割を果たしています。特に鉄は日本ではたたら製鉄として独特の発展を遂げており、山陰地域をはじめとした中国地方は良質な砂鉄を産することから、近世以降では鉄の素材の供給地でした。その製品の中でも世界に知られているのは日本刀でありその作製技術です。現代科学の視点から見ても合理的な作製法で、日本刀の強さや硬さを生み出しています。科学が発達していない時代から日本では技術として使いこなしていたことになりました。

山陰地域にはたたら製鉄を起源とした企業があり、世界的にも多くの製品を世に出しています。本プロジェクトセンターは、大学内の金属関係の研究や力学特性に関連した理論研究者が集まって作ったプロジェクトセンターです。金属関係の研究の例として、複雑な金属組織の解析方法や新たな塑性変形メカニズム、高温の厳しい環境に耐える材料の研究、加工に伴う工具損傷の研究などを行っています。このような様々な観点から研究を行っている研究者が集まり、大学として地域の発展に貢献できるプロジェクトセンターでありたいと思っています。



躡(ふいご)を踏んでいる様子。

マルテンサイト変態と呼ばれる相変態の結晶学的な研究を行ってきました。たたら製鉄で作られた鋼から作られる日本刀は現代では美術品としても世界に知られており、マルテンサイトを利用して作られています。若い金属関係の研究者の活発な研究とともに、学生向けにはものづくりの原点としてたたら製鉄のこころを伝えるべく、古代たたらの実習を和鋼博物館の協力を得て行っています。一般の方や観光客も数多く見学に来られます。



たたらナノテクプロジェクトセンター長
島根大学総合理工学研究科
教授 大庭卓也

島大の多彩な活動を
チョイスしてお伝えします

しまだいい

トピックス



▽ 島根大学発ベンチャー、
「しまね大学発・産学連携ファンド」出資第1号に

約1000倍の薬効性、難治性疾患の治療目指す

松崎有未教授の間葉系幹細胞に関する研究シーズを基に起業した島根大学発ベンチャー「PuREC株式会社」が、「しまね大学発・産学連携ファンド」からの出資を受けることが

決定しました。

間葉系幹細胞は、骨・軟骨・脂肪などへの多様な分化能を持つことから、難治性疾患の治療に広く応用されつつあります。研究を重ねた結果、通常の間葉系幹細胞と比べ、約1000倍の薬効性を持つ高純度な間葉系幹細胞の分離法を開発しました。

PuREC株式会社の小林祥泰社長は「将来性の高い技術であり、多方面での活用を目指したい」と意気込みを述べられました。PuREC株式会社は、島根大学医学部キャンパスを拠点として事業を行う予定です。

▽ 「グローバル志向を持つ学生を育てるには」英語で意見交換

第3回島根大学英語白熱教室を開催

1月23日、名城大学のポール・ウィキン准教授を招き第3回島根大学英語白熱教室を実施し、学生・教職員の84人が参加しました。



プレゼンテーションでは大学のグローバル化に向けて大いに期待されます。

1月23日、名城大学のポール・ウィキン准教授を招き第3回島根大学英語白熱教室を実施し、学生・教職員の84人が参加しました。様々な意見があり、学生の視点から興味深い問題解決方法が提案されました。来年度も新しい企画で、この英語白熱教室が続いていくことが

▽ 第6回赤十字救急法競技大会
心肺蘇生の部・三角巾包帯法の部優勝

島根大学職員チームで心肺蘇生の部5連覇

11月15日、島根県立武道館で日本赤十字社島根県支部主催の第6回赤十字救急法競技大会が開催されました。

制限時間一杯を利用して丁寧な手当てで優勝。2年ぶりのダブル優勝となりました。

島根大学からは教職員で1チーム、学生赤十字奉仕団から2チーム、ほか大会スタッフとして多数が参加。心肺蘇生の部では日頃の練習成果を発揮し、5年連続の優勝となりました。三角巾包帯法も、制



卒業生の活躍と研究・学びの「今」を大いに発信してください。

(島根県邑智郡・60代男性)

写真が豊富で字も大きく読みやすいのがうれしいです。

(島根県安来市・60代男性)

島根大学だからこそできることを沢山紹介してほしいです。

(大阪府大阪市・50代女性)



安来市の島田交流センターを中心に活動している「わんぱくクラブ」のメンバーが本学を訪れ、活動等で得た収益の一部を服部学長に贈呈しました。現在

わんぱくクラブで活動している児童は30名で、本学の教育学部生が取り組んでいる「1000時間体験学修」の基礎体験として、活動の支援を行っています。収益金の一部を手渡された服部学長は「大学での教育のためには大切に使用させていただきます」とお礼を述べました。

ラーコモカフェは教職員や学生がゲストスピーカーとなり、研究や仕事、大学生活などを語って交流を深めようという企画です。第1回目のゲストスピーカーは、服部泰直学長。自らの



学生時代の体験をもとに、国際の感覚を身に付けることとの大切さや、視野を広くもつために「効率を求めない」勉強法など、示唆に富む話題を提供されました。今後は月1回のペースで開催予定です。

島田わんぱくクラブのメンバー来学

▼活動で得た収益金の一部を服部学長に贈呈

国立大学法人は、毎年度業務の実績について報告書を提出し、文部科学省に設置されている国立大学法人評価委員会の評価を受けることを義務付けられています。平成27年11月6日に国立大学法人評価委員会から通知された平成26年度実績の評価結果において、島根大学は全ての評価項目において「順調に進んでいる」と評価されました。

平成26事業年度で注目された取組等(抜粋)

- (1) SNSを活用した高校生向け広報活動の展開
- (2) 地域と連携したソーシャルラーニングの展開
- (3) 地域の銀行による10億円規模のベンチャーファンドとの連携強化
- (4) 先進医療の実践
- (5) 社会人の学び直しプログラム

詳しい情報は島根大学HPへ

TOP > 大学紹介 > 大学運営・将来構想・点検評価 > 中期目標・計画、年度計画等

▼平成26年度に係る業務の実績に関する評価結果

全ての評価項目において「順調に進んでいる」と評価

▼松江市と島根大学の連携・協力関係を密に

松江市との連絡協議会を開催



1月18日、本学で平成27年度松江市・島根大学連絡協議会が行われました。松江市とは平成17年度の包括連携協定締結後、様々な分野で連携・協力を行ってきましたが、これまでに以上に連携を

強化し実質的な取り組みを進めることを目的として本協議会が実施されました。当日は、松江市が策定した総合戦略と、本学が進めている「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」の中で、どのように相互に連携・協力していくかを中心に意見交換しました。来年度以降も年1回連絡協議会を開催します。

▼学生協働スタッフ「図書館コンシェルジュ」主催交流イベント

第1回ラーコモカフェ「学長と語ろう」を開催

読者の声

広報しまだいVol.27に寄せられた声をお届けします。

写真を見て、私も娘と一緒に行ってみたいと思いました。
(島根県安来市・40代女性)

明るく楽しい記事が多くて良かったです。
(島根県安来市・60代男性)

「島大アンバサダ」がキャンパスツアーを開催

島大アンバサダの学生3名が、協定校であるバナラス・ヒンドゥー大学(インド)の学生5名に松江キャンパスを紹介しました。

島大アンバサダとは、海外の協定校等のゲストが本学を訪問された際に、英語で本学の紹介やキャンパス内を

案内する学生です。紹介内容やキャンパス案内は、島大アンバサダの学生が考えた、学生目線ならではの島根大学の紹介となっています。

バナラス・ヒンドゥー大学の学生達は、医・生物ラマンプロジェクトセンターで、ラマン分光法に関する講義の受講や

実験など行うために島根大学を1月20日〜24日にかけて訪問しました。



今回のキャンパスツアーに参加した「島大アンバサダ」の学生3名。左から鳥越琴音さん(教育学部2年生)、池田実咲さん(法文学部2年生)、三代明香里さん(法文学部2年生)。

1月22日、島大アンバサダによるキャンパス紹介では、最初に島根大学の概要や学生生活についてスライドを使い、英語で説明し、その後一緒に松江キャンパスを歩きながら、島大アンバサダの学生が所属する学部や



プレゼンテーション用のスライドは、島大アンバサダの学生が自分たちで作成したもの。

図書館等を案内しました。バナラス・ヒンドゥー大学の

学生は「島大アンバサダの対応は丁寧で素晴らしく、学生が大学紹介をするという方法はとても良い」と話してくれました。

また、島大アンバサダの学生達は、「海外からのゲストに島根大学をより知ってもらうための案内方法を考えたい」とモチベーションが高く、今後の活躍が期待されます。



学生自身によるキャンパス案内は、親しみもてるうえ、日本の大学生活が実感できると評判も上々。

※学年表記は全て取材時のものです。

甘藷を栽培し、焼酎を作っていることを初めて知りました。

(島根県出雲市・80代男性)

医療関係の記事は興味深く読んでいます。

(島根県大田市・70代女性)

いろいろな研究に感動しています。すばらしい活動に期待しています。

(島根県江津市・60代女性)

夢は国と国の橋渡し役！ インドネシアに ジャパンカルチャーを広めたい

クラリッサ・アイリーンさん
(インドネシア「ブラウィジャヤ大学」からの留学生)



昔から日本の文化に興味を持っていたため、直接体験したいと思い留学を決めました。島大では日本語・日本文化について学んでおり、先生のお話や授業を通して、日本語表現の使い方や日本人の考え方が徐々に理解できるようになってきたと感じています。

私はインドネシアで「JAPAN CULTURE DAI-SUKI」という団体に参加していて、日本の文化を紹介したり、広めたりするイベントを企画しています。日本にいる間に、ポップカルチャーの関連企業と協力関係を構

築できるように頑張りたいです。もっと日本文化を深く探り、帰国後はインドネシアの皆さんにもこのイベントを通して日本文化を体験してほしいと考えています。

将来の夢は翻訳か通訳の仕事に就くこと。島大での経験を糧に、様々な国を訪れて自国や日本文化を広めていきたいです。



他の留学生と一緒に日本舞踊を体験。



留学生・留学体験者大集合！

海を越えた島大生

留学は楽しいことがたくさん！ 勇気を出して 未知の世界へ飛び込む

小泉 恵太郎さん
(韓国「国立慶尚大学校」へ留学／
生物資源科学部3年生 ※取材時)



海外生活や外国語を話すことに憧れがあったので、今回の韓国留学は良いチャンスでした。海外では、街を探索するだけでも、日本と違う発見がいくつもあり、非常に刺激的です。周りの人たちはフレンドリーで、一緒に食事をしたことや旅行などが特に楽しかったです。帰国するころには素敵な思い出がたくさんできました。

留学中は主に生物学と韓国語を学びました。言語は



ジョンジュ市で伝統衣装のハンボックを着て。

覚えたことがすぐに実践できるので、習得するには非常に良い環境です。また、現地で実際に生活・交流することで、自分の固定概念を払拭し、教科書では学べない生の情報を知ることができたように思います。

自分の知らない世界に飛び込むのは不安で勇気がいることかもしれませんが、しかし、留学は非常に面白く、得るものは多い。ぜひ積極的に挑戦してください。

読者の声

知らないことを知ることができて楽しく読むことができました。

(島根県雲南市・30代女性)

今の教育や研究がどうあるのかを知るのに役立っています。

(島根県出雲市・60代女性)

勉強も！課外活動も！**頑張ってる人スペシャル！**

01「島大新聞」の制作を通して、 自分の大学をもっとよく知る！

島根大学と山陰中央新報社の包括連携協力協定締結に合わせ、2013年6月に発足した「学生プレス研究会」。初期メンバーとして積極的に取材活動をしている福島達也さんを逆取材してみました！



法文学部3年生 福島達也さん

Q 学生プレス研究会の活動について教えて！

「島大新聞」や「広報しまだい」の記事、その他にはCOO事業のお手伝いで、学外で活動する島大生の様子を取材しています。忙しい時は毎週のように取材が続くこともありませんが、慣れてきたので無理なくこなせるようになりました。

Q 島大新聞ってどうやって作っているの？

まずは編集会議。メンバーがネタを持ち寄り、誰がどの取材をするか振り分けます。また、どのコースをトップに持ってくるか、重要度を見極め、みんなで序列をつけます。

Q 取材するうえで気をつけていることは？

取材に慣れてくると、記事を書く上でのテンプレートのようなものが分かってきました。ただ、それに当てはめて原稿を書くだけでは、自分の力にはなりません。取材したことを自分の中できちん

みんな、読んでね！

と消化したうえで記事を書くようにしています。

また、間違った情報を出さないのは当然のことですが、分かりやすく誤解のない文章を書くよう心がけています。

Q これまでの取材で特に印象に残っているものは？

学長選の取材です。自分たちのいる場所のトップを選出するのに、なぜ学生には全く関係ないことのように扱われるのだろうか？と疑問を持ちました。そこで国立大学法人法を調べたり、教職員の方や学長選考会の方に話を伺ったりしているうちに、大学の運営について知ることができ、大変勉強になりました。

また、それを記事にすることで、大学の運営についてあまり知らなそうな学生にも情報を発信することができて良かったと思います。

Q 今後やってみたいことは？

個人的には、学長にもう一度インタビューをして、その人物像をもっと知りたいです。

それから、学生の声をもっと記事に取り入れていきたい。というのも、現在島根大学には、他大学のように学生の意見を大学に対して提示するような学生代表の組織がありません。学生たちが自分の意見を持つためにも、まずは自分が通っている大学で起きている様々な出来事を把握するために、島大新聞が役立てばいいと思います。



※学年表記は全て取材時のものです。

島大生の日 Cam キャンパ Ch



Q 担当している楽器と、その魅力を教えて！

トライアングルやタンバリン、マリ
ンバ、ティンパニ、スネアドラムなど、
打楽器全般を扱っています。打楽器
は「叩けば音が出せる」という、誰に
でも親しみやすいところが魅力！音

02 立ち見客まで出て大盛況！ みんなで創り上げた「定期演奏会」

島根大学教育学部音楽教育専攻の学生は、学内外で活発に演奏活動を行っています。中でも毎年1月に開催される島根大学管弦楽団定期演奏会は、大きな催しの一つ。その取りまとめ役ともしえる学生代表を務めた折崎由梨さんに話を伺いました。

程がないと思われていますが、リズムの面白さがあるんです。

Q 定期演奏会の学生代表として大変だったことは？

OB・OGの方に賛助出演をお願いするのはもちろん、エキストラさんをまとめなくてはいけないというプレッシャーがありました。が、学外の方と一緒に活動できたことは、大変良い刺激になりました。

Q では演者として、定期演奏会を終えた感想は？

約570名のお客さまが来てくださり、立ち見まで出るほど大勢の方に聴いていただけたのがとてもうれしかったです！こんなに多くの方が足を運んでくださったのは今年だけの成果ではなく、これまで先輩たちが築きあげてきたものがあってこそだと、改めて感謝しました。舞

台の上から見た光景は、今でもしっかりと目に焼き付いています。

打楽器は楽しいよ！



教育学部音楽教育専攻4年生
折崎由梨さん

Q その他の印象に残った演奏活動についても教えて！

17名の仲間と舞台上上がった「卒業演奏会」です。私は山口県出身なのですが、島根大学に入学したからこそ出会えた方たちが応援に駆けつけてくださり、感動しました。また、3月には打楽器専攻生による、初の自主公演「第二回打楽器アンサンブル」を行いました。今回初めて音研の打楽器の学生だけで三重奏ができる人数が揃い、やっと夢が叶いました！卒業後も何らかの形で演奏活動は続けていきたいです。



教えて！動画公開中
先輩が
高校生の方々の疑問に、先輩が動画でお答えします。スマホをお持ちの方は、ぜひご覧ください！

【ココアル】
COCOAR
アプリをおとして、かざすだけ。
感動、体験、AR。

iOS「App Store」および
Android OS「Google Play」から
【cocoar】で検索してダウンロード(無料)

Download on the
App Store

GET IT ON
Google play

【COCOAR】を起動後、折崎さんの顔写真にカメラをかざすと動画が再生されます！

【ご使用上の注意】●COCOARは、iPhone 4S以降(iOS7.x)、Android OS4.0以上~4.4以下が対象です。詳しくは各OSストアでご確認ください。(一部にご利用いただけない機種がございます)●パケット通信料はおお客様のご負担となります。必ず事前にご契約内容をご確認ください。●3G回線では動画再生に時間がかかる場合がございます。Wi-Fi環境での使用を推奨いたします。■COCOAR(ココアル)はスターティアラボの商標登録商品です。■iPhone®、iPad®、App Store®は、米国および他の国々で登録されたApple Inc.の商標です。■Android™、Google PlayはGoogle Inc.の商標または商標登録になります。

「傍」と「楽」を考える

『島根ではたらく』に触れる150分

「島根の学生×社会人による

『島根ではたらく』に触れる

150分」(NPO法人未来創

造が主催)が1月20日、大学会

館で行われました。学生と社会

人の交流を通して、働くことのイ

メージや島根で働くことの意義

を考えるのが狙い。学生22人、社

会人21人が参加しました。

ワークショップでは、10のブース

に分かれ議論を行いました。「働

く」の語源を「傍(はた)を楽にする

」と考え、自分が携わっている

(携わる)こととなる)仕事について、

傍(関係者)と楽(感じる、与え

る喜び)がどんなものかを、社会

人は自らの経験を踏まえて、学

生は自分の将来像を考えてそれ

ぞれ発言しました。

学生からは「自分の専攻と将

来の就職を結び付けて考えるの

が難しい」といった意見が出され、

社会人からは「目の前の業務を

片づけるのが精いっぱい」「傍

のために働くという意識を持って

ない」「仕事をするうえで絶対

的な「正しさ」はなく、学生時

代のやりかたでは通用しない場

面も多い」などの声が聞かれまし

た。

しかし、自らの経験を踏まえて

「年齢とともに誰かのために働く

という意識は変化していく」とい

う社会人ならではの指摘もあり、

学生たちは真剣に聞き入ってい

ました。

企画を終え、感想を求められ

た法文学部の学生は「山陰で働

くことへの思い

を強くするこ

とができ、参

加して良かつ

た」と笑顔。

フアシリテー

ターを務めた

村岡詩織さ

ん(コミュニ

ティーデザイ

ナー)は「実際

に働く社会

人と交流す

ることで、就

活のための合

同説明会な

どでは知るこ

とのできない個人個人の思いに

触れることができたのではない



「傍」と「楽」について社会人と話し合う参加学生たち。

か」と話しました。

(学生プレス研究会・平等正裕)

「無駄」の意味を話し合う

FLATで哲学カフェ「晤語の哲学」

答えない哲学的テーマを、お茶を飲みながら話し合う哲学カフェ「晤語(ごご)の哲学」が1月23日、学生市民交流ハウスFLATで開かれました。当日は雪が降る中19人が参加、「無駄って何？」をテーマに参加者同士の対話が行われました。

「誰にとつても無駄と呼べるものは何か」という問いに、参加者からは「生きていくために必要とされること以外の時間の事ではないか」「自分にとって利用できないものこと」「忘却してしまいい何の感情も残らないものこと」など、さまざまな意見が出されました。

コーディネーターを務めた教育学部の川瀬雅也准教授(哲学・倫理学)は「もし今、社会全体が哲学に代表されるような人文学の軽視という方向に向いて



「無駄」について意見を交わす参加者。

いるのならば、それに対してのカウンター・バランスとして、人文学の魅力や面白さを伝えるために活動をしています。この哲学カフェでは利益とは関係なしに考えを巡らし、答えを出すというよりも、問うことそのものに意味を見いだしてほしい」と話しました。

参加者の出雲市在住事務員、小玉裕己さん(36)は「頭を使っただけで刺激になりました。運動と同じで頭を使うことにより体がリフレッシュされるのでスッキリして月曜日から仕事に打ち込みます。ぜひまた参加してみたいです」。岸晃彦さん(教育学部4

年)は「自分の考えを熟考した上できちんと言葉にし、振り返るという場がもてたのは良かった。哲学カフェにはさまざまな年代の人が来るので、世代による考え方の違いに会うことができたと思います。今後興味の一環として続けていきたいです」とそれぞれ感想を述べました。「晤語の哲学」は毎月一回、土曜か日曜日の午後開催。(学生プレス研究会・瀬良奈弥香)

荒れた森林を元気にしよう!
私たちは森林保全の輪を広げる活動を展開しています。

みんなで森を守ろう!

山陰合同銀行

島根大学オリジナル芋焼酎
神在の里 好評発売中

生物資源科学部神西砂丘農場で生産されたサツマイモ「ベニアズマ」を原材料とした「芋焼酎」

●神在(かみあり)の里(720ml) 2本入りセット... 3,200円(税込)

島根大学生協同組合
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 Tel.0852-32-6240
http://omise.seikyoku.jp/shimane

印刷テクノロジーで、
世界を変える。

TOPPAN

凸版印刷株式会社 www.toppan.co.jp
松江営業所 〒690-0887 島根県松江市殿町383 山陰中央ビル7F

松江キャンパス

混声合唱団



定期演奏会に向けて一致団結する混声合唱団。

歌好きな仲間たちと
心をこめて歌を届ける

女性のやわらかい歌声と男性のどっしりとした声で、練習室に響いています。総勢約60名いる混声合唱団は、昨年夏に開催された中国合唱コンクールで金賞を受賞した実力派。地域のイベントや島根大学医学部附属病院のクリスマスコンサートなど、ボランティア公演も行っています。



のびやかに声が出るまで、発声練習は念入り。

うボランティア公演では、イベントに応じてお客様に馴染みのある曲を選曲したり、合唱の良さが分かるような曲も披露しています」と話す副部長の立花春香さん(教育学部3年生)。

空きコマや部活がない日でも、部室に集まり談笑するほど仲良しです。

現在、1年がかりで計画を進めていた3年生の集大成となる定期演奏会に向けて猛練習中です。

出雲キャンパス

SMILE(スマイル)



年間10名の留学生を受け入れているスマイルメンバー。

交換留学生の支援と
留学体験で視野を広げる

SMILEは、国際医学生連盟(IFMSA)が行っている臨床交換留学、基礎研修交換留学部門の島根支部を務めています。

臨床交換留学は1カ月のカリキュラムとなっており、医学部ではドイツ、フランス、カナダなど様々な国から年間10名の留学生を受け入れています。

留学生は在学生と同じ実習班に入っており、SMILEでは学校の案内や、買い物など生活に関わるこ



留学生のウェルカムパーティを開催。

とを手助けしたり、休日には観光にも出かけ、おもてなしも。

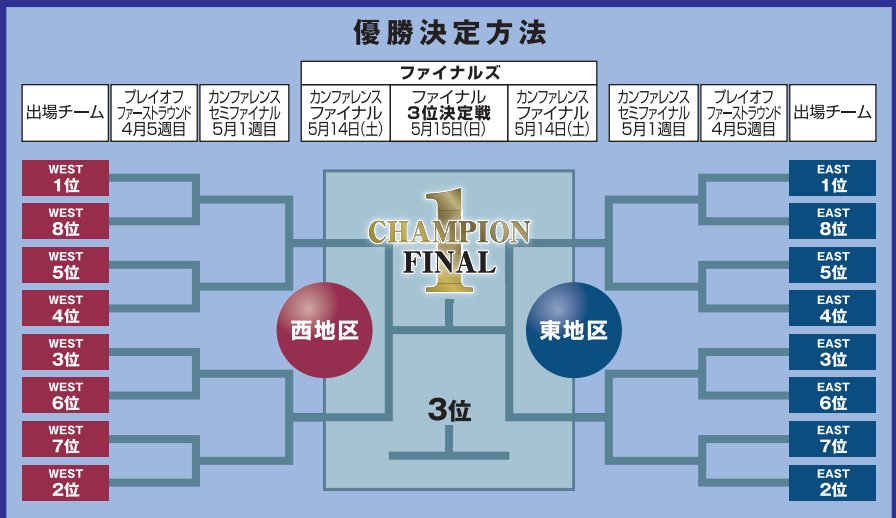
また医学部からも留学生を受け入れた国へ留学することができません。「私はカナダへ行きました。ドクターや病院の雰囲気や日本と全く違って、良い経験になりました」と、代表の神谷奈津美さん(医学部5年生)は海外での経験を役立てたいと話していました。

目指せ、プレイオフ進出！ 神話第六章後半戦に注目

昨年10月から始まった、島根スサノオマジックの神話第六章。リーグ戦28試合(全52試合)を終え20勝8敗、西地区4位(12チーム中)と好位置で前半戦を終えた。

5月の有明でのbjリーグファイナルへ出場する為には、なんとしてでも西地区4位以内でホームでのプレイオフの権利を掴みたい。ホームプレイオフのアドバンテージとしては、選手の移動負担の軽減もさることながら、何よりも会場を埋め尽くすスサノオブスターの大声援を背に戦えることが最大のアドバンテージになるに違いない。

4月のホームゲームは4試合。いずれもホームプレイオフをかけた西地区の強豪とのサバイバルマッチが続く。特に浜松戦は“新装”松江市総合体育館での初開催。ぜひ会場で直接選手へブーストしよう！



試合日	開始時間	対戦チーム	会場	試合日	開始時間	対戦チーム	会場
4月からのホームゲーム	4/16(土)	19:00	滋賀レイクスターズ	4/23(土)	19:00	浜松・東三河フェニックス	松江市総合体育館(松江市)
	4/17(日)	13:00		4/24(日)	13:00		松江市総合体育館(松江市)

島根スサノオマジックの最新情報・試合・チケットなど

島根スサノオマジック

検索

お問い合わせ先

島根スサノオマジック事務局 0852-60-1866 (平日10時~18時)

島根大学支援基金寄附者一覧 ご協力ありがとうございました。

(平成27年11月1日~平成28年1月31日にご寄附いただいた皆さま)
(五十音順・敬称略)

冠寄附	島根大学生生活協同組合 改修工事協力金 第一食堂改修工事費として	島根大学では学生に対する修学支援及び社会貢献事業を充実させるため、「島根大学支援基金」を募集しています。寄附書はホームページにも掲載しておりますが、郵送もいたしますので、お問い合わせください。 TEL:0852-32-6603(総務課) ホームページ http://www.shimane-u.ac.jp/introduction/fund/fund_recruit/ ※ご寄附をいただいた皆さまの中で、「HP等への掲載を希望しない」とされた方は、掲載しておりません。
法人等からのご寄附	島田わんぱくクラブ 島根大学医学部総合医療学講座	
個人からのご寄附	香月 邦恒 竹内 美佐子 山根 佳子	

投稿の
お願い

『広報しまだい』は、島根大学と地域の方々との相互理解を大きな目的としています。島根大学から地域に情報を発信してほしいこと、地域の方々からの島根大学に関する話題、島根大学に対する要望、その他ご意見、ご質問などをお気軽にお寄せください。ご投稿お待ちしております。

投稿先

〒690-8504 松江市西川津町1060 島根大学 広報室
TEL: 0852-32-6603 FAX: 0852-32-6019
E-mail: gad-koho@office.shimane-u.ac.jp
ホームページ: <http://www.shimane-u.ac.jp>

編集後記

春がやって参りました。3月には卒業生が希望を胸に旅立ち、これから新入生を迎え、この島根大学にも新たな風が吹き始めます。「広報しまだい」の担当者である我々も気持ちを新たに、これからも皆さまにホットな情報をお届けしたいと思っております。

さて、広報しまだい28号はいかがでしたか。毎号、読者の皆さまより多くのご意見やご感想、「ここはこうすべき」というご指摘、「こういう記事が見たい」というご要望など、たくさんのお声をいただいております。我々スタッフにとって読者の皆さまのお声は何より貴重で、いつも参考に、また励みにさせていただいております。

今、この編集後記をご覧いただいた皆さま、綴じ込みのハガキがございまして、今号のご意見やご感想をお聞かせいただけたら幸いです。今後の制作の参考にさせていただきます。

次回の広報しまだいは平成28年7月発行です。お楽しみに!!

PRESENT

ご意見をいただいた皆さまの中から抽選で10名様に、島大農場で収穫・加工された「りんごジャム」をプレゼントします。

※当選者のお知らせは発送をもって代えさせていただきます。
※応募締切/平成28年6月10日必着



知的好奇心の旺盛なあなたへ



市民パスポート会員とは、
年会費5,000円で
どなたでも入会でき、
様々なサービスを1年間
(4月1日～翌年3月31日)
ご利用いただけます。

島根大学 市民パスポート会員のご案内

島根大学は新しい学びなおしのスタイルとして、
社会人のための市民パスポート会員を募集します。

市民パスポート会員向け講義についての 情報提供と受講

本学が実施する「公開講座」や正規の授業を地域の方に開放する
「公開授業」及び「大学開放事業」に無料で参加できます。

地域学習支援ITシステムを用いた講義の聴講

本学で開講されている授業等をインターネットを経由して無料で聴講できます。

広報しまだいの送付

本学が年4回(4月・7月・10月・1月)発行している、
本学の教育、研究及び地域貢献活動についての
情報を提供する「広報しまだい」をお送りします。



附属図書館の利用

- ①会員の方は、会員証の提示により、ご利用できます。
- ②本学が所蔵する図書を5冊(2週間)まで借りることができます。
なお、研究室所蔵の資料、雑誌、AV資料、貴重資料等は貸出できません。

学生市民交流ハウス(松江キャンパス)の利用

本学の学生と地域の方々とのコミュニケーション及び交流する場として、
松江キャンパス内「学生市民交流ハウス」を利用できます。

大学施設の利用

本学の施設(教室・体育館・野球場・テニスコート・陸上競技場・
サッカー場等)を半額料金で利用することができます。
ただし、会員が主催する催事で、本学が承認したものに限りです。

各種催事(国際交流、学生との交流など)への参加

会員を対象とした国際交流や学生との交流などの催事に無料
(ただし、実費等が必要なものがあります)で参加できます。



【お問い合わせ先】

島根大学総務部総務課 市民パスポート会員担当

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 TEL:0852-32-6603

E-mail: webinfo@office.shimane-u.ac.jp

詳細は島根大学ホームページの
バナーからご覧ください。

<http://www.shimane-u.ac.jp/>

島大

検索